

中学生の社会的思考力・判断力の発達に関する研究（Ⅱ） — 公民的分野を事例とした調査を通して —

加藤 寿朗*・梅津 正美**・前田 健一***・新見 直子****
大島 悟*****・竹崎 葉子*****・原 義昭*****・前島美佐江*****

Toshiaki KATO, Masami UMEZU, Kenichi MAEDA, Naoko NIIMI, Satoru OHSHIMA, Yoko TAKEZAKI,
Yoshiaki HARA, and Misae MAEJIMA

A Study on the Development of Logical Thinking and Judgment in Social Studies in
Junior High School Students II

— Through the Analysis of the Questionnaire Using Contents of the Civics —

要 旨

本研究の目的は、中学生の社会的思考力・判断力に焦点をあてた調査を行うことによって社会認識の発達の変容を明らかにすることにある。調査・分析にあたっては、社会科の学力である社会的思考力・判断力を構成する能力として、事実判断力、帰納的推論能力、演繹的推論能力、社会的判断力、批判的思考力の5つを想定しながら、次の2点を検討した。(1)中学生の社会的思考力・判断力の発達の傾向、(2)社会的思考力・判断力を構成する諸能力の関係性について。中学生のデータに基づく分析の結果、社会的判断力と批判的思考力は学年進行に伴って高くなる傾向が見出され、それは特に2年生から3年生にかけて伸長する傾向にあった。また、帰納的推論や演繹的推論から社会的判断へ、また社会的判断から批判的思考へという能力の難度の順序性や能力間同士の相互関連的な関係が見出された。

【キーワード：社会科学力，社会的思考力・判断力，発達の調査，中学生，公民的分野】

I 研究目的と方法

1. 研究目的

子どもは社会をどのように認識しているのだろうか、認識していくのだろうか。また、子どもの社会認識の発達に即した授業構想に生かせる社会科教育としての発達の研究は、何をどのように明らかにすればよいのだろうか。このような問題意識から本研究は、子どもの社会認識の発達に即した授業実践のための根拠となる認識の発達の変容に関する実証的データを収集することを目的とする。

これまで行った発達の調査では、児童期の社会認識の発達過程は、量的増加と共にいくつかの質的に異なった発達段階に区切られ、連続性と不連続性を有するダイナミックなものであることが明らかになった¹⁾。そして、これら一連の研究の中で、青年期においても社会認識の質的な転換期と想定される時期が見出された。しかし、これらの研究は小学校児童の社会認識発達に焦点をあてたものであり、その質的転換の時期も仮説的なものであった。そこで筆者らは、「青年期の社会認識発達の質的な転換」を仮説としながら、中学生の社会的思考力・判断力に焦点をあてた発達の調査を行い、社会認識の発達の変容について実証的に検討してきた。その結果、中学生の社会的思考力・判断力²⁾の発達の特徴として次の3点が指摘された³⁾。

① 中学生の社会的思考力・判断力は、学年進行に伴って高くなり、特に2年生から3年生にかけて伸長する

傾向が見られること。

② 同じ到達基準でも分野（歴史的分野，公民的分野）によって到達している人数に違いが見られ、分野によって高いレベルに到達しやすい問題とそうでない問題があること。

③ 社会的思考力・判断力を構成する諸能力は互いに独立する能力ではなく、相互に関連しあう能力であること。これらの結果は、中学生の社会認識発達の連続性（学年進行に伴う思考力・判断力のレベルが上昇）と不連続性（能力が著しく伸長する時期の存在や分野による特殊性）という特徴を示唆しており、このことから青年期の社会認識発達には量的増加と共に質的に異なった段階（質的な転換）が存在する可能性が考えられる。

本研究は調査対象を広げることによって、上述した発達の特徴についての検証を行うことを目的とするが、その中で特に、①中学生の社会的思考力・判断力の発達、②社会的思考力・判断力を構成する諸能力の関係性についての検討を主として行う。なお、本稿では紙幅の都合上、公民的分野を取り上げた調査の結果について検討する⁴⁾。

2. 研究方法

これまでの社会科教育研究で行われてきた子どもの認識を研究する方法は次の2つに大別される⁵⁾。ひとつは、実際の社会科授業やその記録の中に見出される子どもの社会認識の仕組みや変容を諸科学の成果を援用しながら

* 島根大学教育学部初等教育開発講座

*** 広島大学大学院教育学研究科

島根県教育庁義務教育課（元島根大学教育学部附属中学校）

** 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

**** 広島文教女子大学人間科学部

島根大学教育学部附属中学校

分析・説明する理論的研究であり、もうひとつは意図的・実験的な授業や調査を通して検討していく実証的研究である。本研究では、中学生の社会的思考力・判断力を測るための調査問題を作成し、回答内容を分析することによって認識発達の様相を検討する。調査の手続きは次の通りであった。

(1) 調査方法

調査問題は歴史問題と公民問題からなり、それぞれの問題を40分で回答させた。調査は質問紙による選択肢と自由記述問題からなり、問題は全学年共通であった⁶⁾。

(2) 調査計画

1) 調査問題

「Ⅱ 社会的思考力・判断力を測る調査問題の構成と実際」で詳述する。

2) 対象と時期

島根県下の中学校1校を対象とした。学年別にみると、1年生は166名、2年生は155名、3年生は169名であり、2009年12月から2010年1月に調査を実施した。作成した調査問題について調査協力校の校長から承諾を得た後、学校を通じて調査を実施した。

Ⅱ 社会的思考力・判断力を測る調査問題の構成と実際

中学生の社会的思考力・判断力の発達を測る調査問題の構成の方法を明らかにする。具体的には、次の4つの問題について明示する。①目標－授業－評価の一体化の観点から、社会科授業と結びつけて到達目標となり、評価の観点となる社会的思考力・判断力をどのように規定するのか。②社会的思考力・判断力の発達を測る調査問題には、どのような類型を設定できるのか。③社会的思考力・判断力の発達を測る調査問題は、どのような基本原則のもとに構成されるのか。④調査問題の実際と調査結果の分析の観点はどのようか。

1. 社会科における社会的思考力・判断力のとらえ方

社会科授業と結びつくように社会的思考力・判断力の調査問題を構成する場合に、まず押さえておかねばならないことは、「社会的思考力・判断力」は、社会的事象についての知識・理解と独立して存在する形式的能力ではなく、「知識」と、問いと資料活用の技能を基盤とする「思考技能」とが一体化した能力であるということである。こうした理解により、「中学生の社会認識の発達」を、教科指導を通した「中学生の社会的思考力・判断力の形成・発達」に変換して考察することができると考えた。そこで、社会科授業に基づいて「知識」「思考技能」「社会的思考力・判断力」の質とその関連について、具体的に考察していくことにする。

(1) 社会的事象に関する知識の構造

授業で、教師と子どもの間でやり取りされる社会的事象に関わる知識は、その質の違いに着目すると「知識の構造」としてとらえることができる。まず、教師や子ど

もの社会的事象に関する理解の中身を示す知識は、事象記述・事象解釈・時代解釈・社会の一般理論・価値的知識・メタ知識の6層から成るものをつかんでおきたい。以下に、それぞれの定義と事例を示す⁷⁾。

- ① 事象記述：特定の事象に関する事実そのものを記述した知識。事例：「カリフォルニアの『インディアン』は日干しレンガの家に住んでいた。」「グレートプレーンズの『インディアン』はティーピー（テント）の家に住んでいた。」
- ② 事象解釈：特定の事象に関する事実を解釈し、因果、目的結果、意義などを説明した知識。事例：「カリフォルニアは降水量が少ない。粘土を乾燥させて日干しレンガを作るのに適した気候だったので、家の材料に日干しレンガが使われた。」「グレートプレーンズの『インディアン』は、平原に沢山いたバッファローを追う生活をしていて。彼らは、生活に不可欠な移動性の高さを基準に、テントを住居とした。」
- ③ 時代解釈：個別の事象（事実）の解釈を総合して広い時間的範囲にある時代の社会の特色を説明した知識。事例：「現代社会は、グローバル社会である。」「近代に入り、私たちは大量生産・大量消費の社会で生きてきた。」「今日、持続可能な社会が構想されている。」
- ④ 社会の一般理論：個々の事象の起因や影響を説明するのに用いられる一般的概念的な知識。事例：「大きな輸送手段を持たず、他との交流の乏しい生産力の低い社会では、住居は手近な材料で作られる。」「住居は気候や生産様式に左右される。」
- ⑤ 価値的知識：個々の事象を、解釈内容をふまえて評価的・規範的に判断した知識。事例：「自然環境と調和した『インディアン』の生活は望ましい。」「経済発展に遅れ、物質的に乏しい『インディアン』の生活は望ましくない。」
- ⑥ メタ知識：知識構成の背後にある立場や価値観を吟味し解釈した知識。事例：「今日、近代社会（合理主義・科学主義・物質主義など）の評価をめぐる議論が活発になっている。」

事例から明らかなように、事象記述・事象解釈・時代解釈・社会の一般理論の4つは、後者が前者を包括し説明する関係をなしている。また、価値的知識は、客観的で多面的な事実・事例を根拠として、ひろく議論にさらされていくべき知識である。そして、メタ知識は、知識を対象化して解釈するための知識である。

(2) 社会科授業における社会的思考力・判断力の育成

社会的事象に関する知識は、授業過程では、問い及び資料の活用と連動して子どもたちに習得されよう。一般的には、事象記述とその構成要素は、「いつ」「どこで」「誰が」「なにを」「どのように」という問いにより導かれるし、事象解釈と時代解釈は、「なぜか」「(その結果)どうなるか」「(時代・社会の本質は)何か」という問いによって導かれよう。また、社会の一般理論は、「どういう意味か」「(一般的に社会は)どのようであるか」という問いによって導かれよう。価値的知識は、評価すべ

表1 授業における「社会的思考力・判断力」と「問い」・「知識」の関わり

問 い	社会的思考力・判断力とその内容		知 識
いつ、どこで、誰が、なにを	事実判断	資（史）料をもとに、事実を判断し記述できる。	事象記述
なぜか、（その結果）どうなるか、（時代の社会の）本質はなにか。	推 論	事象の原因、結果、意味や時代の社会の意義・特質を解釈し説明できる。	事象解釈 時代解釈 社会の一般理論
～よいか（悪い）、望ましいか（望ましくないか）	価値判断	事象を評価的に判断できる。	価値的知識 （評価的知識）
いかに～すべきか	意思決定	論争問題や論争場面において望ましい行為や政策を根拠にもとづいて選択できる	価値的知識 （規範的知識）
その知識の背後にはどのような価値観や立場性があるか。その知識は、どのような手続き・方法により主張されているか。	批判的思考	知識（言説）に内在する価値・立場を吟味できる。 知識（言説）の主張の手続き・方法を吟味できる。	メタ知識 （知識を解釈するための知識）

き事象に対して「よいか、わるいか」（その問いに対する回答としての知識は「評価的知識」）、「いかにすべきか」・「どうすればよいか」（その問いに対する回答としての知識は「規範的知識」）という問いによって論争的に導かれるべきものがある。メタ知識は、「その知識の背景には、どのような価値や立場があるか」、「その知識はどのような手続きや方法により構成されているか」といった問いにより読み解かれる。そして、それぞれの知識レベルの習得には、問いに基づいて、必要な資料を収集し、選択し、観察し、読み取り、解釈していく技能が必要となるのである。

また、問い・資料活用の技能と知識の関連は、子どもたちが駆使する「思考力・判断力」の質を決定していよう。「グレートプレーンズの『インディアン』はどんな家に住んでいますか。」と事象記述の構成要素を問われて、資料の観察・読み取りにより、「ティービーと呼ばれるテントの家です。」と答えるとき、子どもが駆使している思考力の質は、社会的な事象についての事実の判断である。このレベルの思考力を「事実判断」と呼ぼう。「グレートプレーンズの『インディアン』はなぜテントの家に住んでいるのですか。」と問われて、子どもたちが一般理論を活用しながら気候や生活様式と住居の形態とを因果的に結びつけた事象解釈を導こうとすると駆使している思考力は、事象と事象の関係づけや社会の意味・特質を解釈する思考力である。このレベルの思考力を「推論」と呼ぼう。そして、この「事実判断」と「推論」とが結びついた能力を「社会認識力」と呼ぶことにする。「こうした『インディアン』の生活を望ましいと考えますか。」と問われれば、子どもたちは、自然環境の保全あるいは物質的豊かさの追求と開発など多様な価値的立場から「インディアン」の住居形態や生活様式を解釈し、それらを根拠にして評価を下していくことになろう。複数の価値的知識を、事象についての事実的知識を根拠に評価（価値判断）し選択（意思決定）していく能力を「社会的判断力」と呼ぼう。さらに、社会的事象に関する知識の背景にはどのような価値観や立場性があるのかを読

み解き、メタ知識を明らかにしていく思考力を「批判的思考力」と呼ぶことにする。

以上の考察を経て、社会科授業で育成をめざす「社会的思考力・判断力」は、問い及び知識との相互の関わりにおいて、表1のように整理して示すことができる。

(3)社会科学力の構造としての社会的思考力・判断力

筆者は、「知識」、「社会的思考・判断」、「思考技能」の機能的な連関構造として解釈することによって、社会科授業を通じて意図的・計画的に育成される社会認識力と社会的判断力及び批判的思考力の総体が、「社会科学力の構造」であると規定する。社会認識力は、事実判断を基盤に、歴史的な事象間の関係や時代の社会の意味・本質を推論し解釈する能力である。社会的判断力は、社会的（歴史的）な論争問題・場面に対応する複数の政策・行為の選択肢を、事実を根拠に評価（価値判断）し選択（意思決定）していく能力である。批判的思考力は、社会的な事象に関する解釈の背後にある立場や価値観を読み解き吟味していく能力である。社会科学力は、社会的な事象に関する知識（の構造）と、問い及び様々な形態の資料から必要なデータを選択できる、データを読み解くことができる、解釈内容を適切に表現できる、合理的な仮説を立てることができる、といった思考技能とに支えられた3つの能力の連関構造として把握したい。また、生徒の頭の中で進行する社会認識の深化の過程（社会科学力の形成過程）を授業レベルで確定していくためには、生徒が、習得・形成した社会認識を外にむかって表現できなければならないので、表現のために必要なコミュニケーション技能（読む、話す、書く、聞く）を、社会科学力の基礎学力として位置付けておきたい。

いわゆる「観点別学習状況の評価」における社会科の第一の評価観点になっている「関心・意欲・態度」については、「社会的な人格」を構成する要素として、社会科学力とは機能的に分けて捉えるべきだと考える。学校教育の中で意図的・組織的に行われる社会科授業は、社会認識力・社会的判断力・批判的思考力を中核とする到達目標としての学力形成を中心目標と為されるべきで、「社

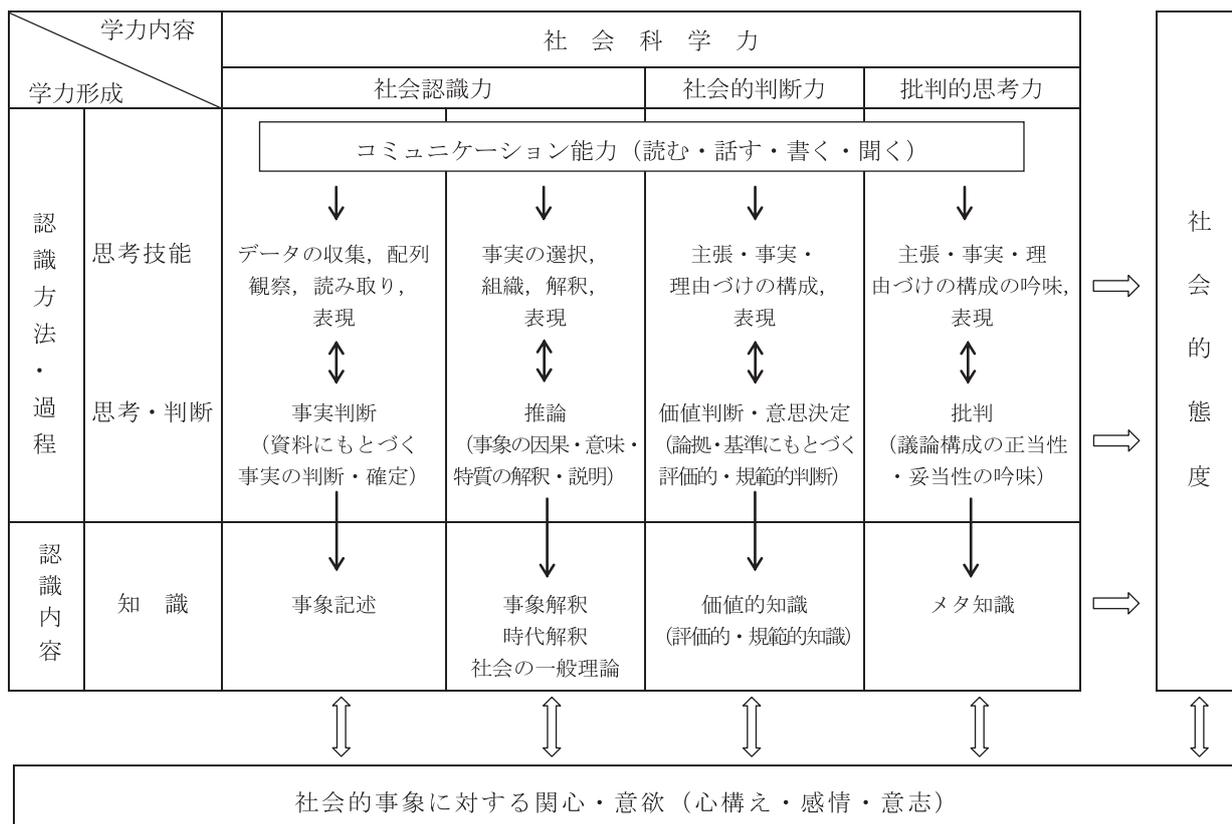


図1 社会科学力の構造と「関心・意欲・態度」との関係

会的人格」としての社会的な事象に対する関心・意欲や社会的態度は、社会科学力の形成過程を通して育成されていくべきものとする。社会科学力と会的人格としての「関心・意欲・態度」との関係モデル化したものが、図1である⁸⁾。

2. 調査問題の種類

調査問題には、3つの種類を設定した。すなわち、①社会認識力育成型、②社会的判断力育成型、③批判的思考力育成型、の3種類⁹⁾である。これら3種類は、知識(内容)と思考技能(方法)が一体となった社会科に固有の思考力・判断力を評価するテスト問題の基本型である。

① 社会認識力¹⁰⁾ 育成型

社会的な事象に関する事実を資料に基づいて確定し(事実判断)、それらの事実間の関係や事象の本質を推論することを通して解釈し説明できる能力を評価する問題

② 社会的判断力育成型

社会的(歴史的)論争問題に対応する複数の政策・行為の選択肢を、事実を根拠に評価(価値判断)し選択(意思決定)していく能力を評価する問題

③ 批判的思考力育成型

文字・図像・映像・音声などにより示される、社会的な事象に関する言説の背後にある価値観や立場、あるいは言説の構成方法を、時代の社会の特質と関わらせて読み解き吟味していく能力を評価する問題

3. 調査問題構成の基本原則

(1) 社会認識力育成型問題の構成

回答過程を、推論過程として組織する。推論過程には、大きく2つのパターンがある。ひとつは「帰納的に推論する過程」である。この過程は、資料・データを用意し、それに対して「何か」「どうなっているか」という問いにより事実を引き出させ、その事実に対して「なぜ」「どうなるか」「(意義・特質は)何か」という問いにより時代解釈や一般理論を導かせるように展開する。もうひとつは、「演繹的に推論する過程」である。この過程は、まず資料等により、生徒に時代の社会の本質を説明した時代解釈や一般理論をつかませる。そして、事実・データに対して「なぜか」「どうなるか」と問い、時代解釈や一般理論を応用して事実がもたらす予測・結果・影響を説明させるように展開する。

(2) 社会的判断力育成型問題の構成

回答過程を、社会的(歴史的)論争問題に対する、主張(価値的知識)・理由づけ(事象解釈・時代解釈)・事実(事象記述)を基本的な要素とする「議論」の構造¹¹⁾に即して構成する。この場合、論理的には3つの問題パターンを構想することができる。第1は、論争問題に対して、事実を根拠に理由づけを構成させ、主張を説明させ討論させるものである。第2は、論争問題に対する主張と理由づけを提示し、それを支えるのに適切な事実・データを選択・記述・説明させるものである。第3は、主張と主張の根拠になる事実・データを示し、それらから理由づけを記述・説明させるものである。

表2 公民問題の構成と分析の観点

問題類型	番号	問題内容	分析の観点	バブル	評価基準	模範回答例
「事実判断」問題	問題1	コンビニエンスストアにおける工夫を指摘させた。	評価基準に基づいて、回答を分類した。	a 商品 b 店舗設計 c レイアウト d 施設、備品 e 商品配置 f 安全、衛生への配慮	目玉商品や季節商品、弁当類や飲み物など品揃えの傾向が他の店と違う。品揃えの量は多くないが、店の大ききのわりに種類は豊富である。 開放度や透明度を高めるガラススクリーン。視線を遮らない棚の配置、明るい照明、商品をすぐに充足できるバックヤード。 鳥型に商品を陳列（右回り）、出入口口近くにレジやA.T.M.・コピー機、店の奥にあるトイレ 加温器、2つのレジ、A.T.M.、コピー機、トイレ、灰皿、ゴミ箱、オーブンレンジ ついでに買いたい商品のくくり、関連商品や便致に近い商品を近くに配置、季節商品や目玉商品をレジの近くに配置、売れ筋商品を店の奥に配置 防犯灯や分別ゴミ箱など安全や衛生への配慮	
	問題3-1	コンビニエンスストアでPOSシステムからの情報をどのように活用するかを自由記述させた。	評価基準に基づいて3つのレベル（レベル低：0、レベル中：1、レベル高：2）に分類した。	0 1 2	事実を間違えて捉えている。説明不足である。散間に正対していない 2つの情報を使いながら活用の仕方を考えている 3つ以上の情報を使いながら活用の仕方を考えている 上記以外の回答 無回答	<ul style="list-style-type: none"> どの時間帯に、どの商品（弁当、惣菜、飲み物）がよく売れるのか、どのような組み合わせでお客様は商品を買うことが多いのかを調べて、商品の仕入れの量を考える。 どのようなお客様が、どのような時間に多く来るのか、何を買うのかを調べ、時間帯と売れる商品を考えて仕入れ量を調整する。 よく売れる時期、時間、量、客層などを調べて新しいヒット商品の開発に役立てる。
「演繹的推論」問題	問題3-2	売り上げ上昇のために既存のPOSシステム情報以外にどのような情報を集めるかとその情報を集める理由を自由記述させた。	評価基準に基づいて3つのレベル（レベル低：0、レベル中：1、レベル高：2）に分類した。	0 1 2	事実を間違えて捉えている。説明不足である。散間に正対していない 1つの情報とその理由をあげながら正しく説明している 2つ以上の情報とそれぞれの理由をあげながら正しく説明している 上記以外の回答 無回答	<ul style="list-style-type: none"> 運動会や祭など地域の行事や天候を調べ、お客様のニーズを予想して商品の仕入れの量を調整する。 ライバル店の客層や売れ筋商品、サービスなどを調べて、違った商品を置いたり、異なるサービスをしたりして客を呼び込む。
	問題2-1 問題2-2	コンビニエンスストアの24時間営業規制に対する意見を選択させた。問題2-1の選択肢を選んだ理由を自由記述させた。	選択肢の番号 評価基準に基づいて3つのレベル（レベル低：0、レベル中：1、レベル高：2）に分類した。	0 1 2	<ul style="list-style-type: none"> 賛成である 反対である どちらとも言えない 判断結果（問題2-1）と根拠（問題2-2）の内容が不整合 判断結果（問題2-1）と根拠（問題2-2）の内容は整合するが、現代社会の特徴に関わる1つの視点からだけの判断である 判断結果（問題2-1）と根拠（問題2-2）の内容が整合し、現代社会の特徴を多面的に捉えた判断である 上記以外の回答 無回答	①賛成である ・お客がいるかどうかにかかわらず営業することによって電気エネルギーを無駄に消費している。 また、特に深夜における青少年の非行につながることも多いから。 ②反対である ・深夜や早朝に働く人や夜型の生活をする人など、人々の多様な生活の時間帯に対応するためには24時間営業の店が必要である。また、特に深夜の犯罪などの防犯効果があるから。 ③どちらとも言えない ・特に深夜における青少年の非行につながる一方、防犯の効果があるから。
「価値判断・意思決定」問題	問題4	会話文と資料（町の電気屋A店のチラシ）から、「町の電気屋」A店の販売戦略を推測させ自由記述を求めた。	評価基準に基づいて3つのレベル（レベル低：0、レベル中：1、レベル高：2）に分類した。	0 1 2	事実を間違えて捉えている。説明不足である。散間に正対していない 小売店（家電屋）は、業態（専門店と量販店）ごとに異なった経営努力（経営方針）を行っていることがわかる 業態ごとに異なる小売店の経営努力の意図・目的を、販売と消費活動の相互的な関係からわかる 上記以外の回答 無回答	・顧客のニーズに合った個人経営ならではの細かなサービス（地域行事や客の年齢に合ったサービス、家電修理の相談）をすることによって、大型店と経営戦略の差別化を図り、売り上げを伸ばすこと。 ・城下地区に絞って呼びかけ、個人経営だからこそできるサービスをしながら城下地区を中心とした客を確保すること。 ・「今だけ」「君だけ」「特別サービス」「あなたの町の」という「限定」を示す言葉を使ってお客様の購買意欲を高めながら地域に根ざした店であることを訴えること。
	問題4	会話文と資料（町の電気屋A店のチラシ）から、「町の電気屋」A店の販売戦略を推測させ自由記述を求めた。	評価基準に基づいて3つのレベル（レベル低：0、レベル中：1、レベル高：2）に分類した。	0 1 2	事実を間違えて捉えている。説明不足である。散間に正対していない 小売店（家電屋）は、業態（専門店と量販店）ごとに異なった経営努力（経営方針）を行っていることがわかる 業態ごとに異なる小売店の経営努力の意図・目的を、販売と消費活動の相互的な関係からわかる 上記以外の回答 無回答	・顧客のニーズに合った個人経営ならではの細かなサービス（地域行事や客の年齢に合ったサービス、家電修理の相談）をすることによって、大型店と経営戦略の差別化を図り、売り上げを伸ばすこと。 ・城下地区に絞って呼びかけ、個人経営だからこそできるサービスをしながら城下地区を中心とした客を確保すること。 ・「今だけ」「君だけ」「特別サービス」「あなたの町の」という「限定」を示す言葉を使ってお客様の購買意欲を高めながら地域に根ざした店であることを訴えること。

社会認識力育成型

社会的判断力育成型

批判的思考力育成型

(3) 批判的思考力育成型問題の構成

回答過程を、資料に組み込まれている価値・解釈・事実から成る言説の構成の正当性や妥当性を吟味させ、そのような言説の構成になる根拠・理由を説明させることと、言説の背景をなす時代の社会の特質をつかみ説明させることを組み合わせて構成する。

4. 調査問題の実際と分析の観点

調査問題は、歴史問題と公民問題からなり、それぞれ思考力・判断力育成問題の3類型と構成の基本原則をふまえて作成した¹²⁾。また、歴史と公民の問題構成や問題数を可能な限り揃えた。公民問題の構成についてまとめたものが表2である。

Ⅲ 分析の手順

前述したように本研究の目的は、中学生の社会的思考力・判断力とそれぞれの能力間の関係性を発達的に検討することにある。そこで調査結果は以下の手順で分析することにした。

- ① 表2に示す「分析の観点」に基づきながら、生徒の回答を得点化した。まず、問題1（社会認識力育成型「事実判断」問題、以下は事実判断問題）では、表2に示す6つの評価基準に該当する事柄を指摘した数（指摘数）を回答者の得点とした（得点範囲：0点から6点）。問題2-1（社会的判断力育成型「価値判断・意思決定」問題、以下は価値判断・意思決定問題）では、3つの選択肢のどれを選択したかに基づいて回答者を分類した。問題2-2（社会的判断力育成型問題、以下は社会的判断問題）、問題3-1（社会認識力育成型「帰納的推論」問題、以下は帰納的推論問題）、問題3-2（社会認識力育成型「演繹的推論」問題、以下は演繹的推論問題）、および問題4（批判的思考力育成型問題、以下は批判的思考問題）の4つの問題では、表2に示す評価基準に基づいて、最もレベルの低いレベル0、中程度のレベル1、最もレベルの高いレベル2のいずれかに回答者を分類した。
- ② 社会的思考力・判断力の発達傾向を分析するにあたっては、学年進行に伴い各問題解決に使用する社会的思考力・判断力のレベルも上昇するか否かを検討する。問題1では分散分析を使用して、指摘数が学年進行に伴って増加するか否かを検討する。問題2-1では χ^2 検定を使用して、選択肢の選択傾向に学年差が見られるか否かを検討する。問題2-2、問題3-1、問題3-2、問題4では χ^2 検定を使用して、学年進行に伴ってレベル2に分類される人数が増加し、レベル0やレベル1に分類される人数が減少するか否かを検討する。
- ③ 社会的思考力・判断力を構成する諸能力の関係性の検討にあたっては、以下の関係性を仮定して検討を進めた。まず、諸能力の中で社会認識力（事実判断力）を生徒にとって最も基盤となる思考力・判断力と仮定する。そして、残り4つの思考・判断する能力の活用において

は社会認識力（帰納的推論能力）が最も生徒にとって容易であり、次いで社会認識力（演繹的推論能力）、その次に社会的判断力であり、批判的思考力の活用が最も難しいとする。この仮定に基づいてそれぞれの能力が仮定した関係にあるのかを検討する。分析ではまず、基盤的な能力と仮定する事実判断力と他の能力（帰納的推論能力、演繹的推論能力、社会的判断力、批判的思考力）との関係を検討する。次に、生徒にとっては事実判断力の次に難度が低いと仮定した帰納的推論能力と他の能力の関係、及びより高次な能力と仮定する批判的思考力と他の能力の関係について分析する。さらに、帰納的推論能力、演繹的推論能力、社会的判断力、批判的思考力の4つの能力間の相互関連について検討する。具体的には以下のような手順で分析を進める。

まず、事実判断力を測る問題における指摘数が他の問題におけるレベルと関連するか否かについて分散分析を使用して検討する。次に、帰納的推論能力を測る問題においてレベル2に分類された者は演繹的推論能力、社会的判断力、批判的思考力を測る問題ではどのような評価を得ているかについて χ^2 検定を使用して検討する。さらに、批判的思考力を測る問題においてレベル2に分類された者は、帰納的推論能力や演繹的推論能力、社会的判断力を測る問題でも高い評価を得ているか否かについて χ^2 検定を使用して検討する。最後に、帰納的推論問題、演繹的推論問題、社会的判断問題、批判的思考問題の各問題においてレベル0～レベル2に分類された者が、他の問題においてそれぞれどのような評価を得ているかについて χ^2 検定を使用して検討する。

Ⅳ 調査結果の分析①

—社会的思考力・判断力の発達—

1. 社会認識力育成型問題の調査結果

(1) 事実判断問題（問題1）の結果

指摘数について学年（1年生、2年生、3年生）を要因とする分散分析を行った（図2）。その結果、学年間の差が見られた（ $F(2, 480) = 5.49, p < .01$ ）。学年間の差を検討したところ、2年生の指摘数（平均値= 2.28）が3年生（平均値= 1.97）や1年生（平均値= 1.95）よりも多かったが、3年生と1年生の間には統計的に意味のある違いは見られなかった。

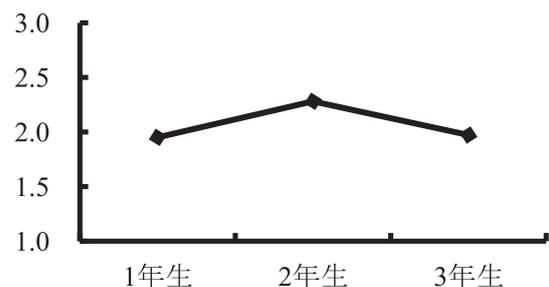


図2 事実判断問題の平均指摘数

(2)帰納的推論問題（問題3-1）の結果

3（レベル：0，1，2）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して，帰納的推論問題の回答における各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討したが学年差は認められなかった（図3）。

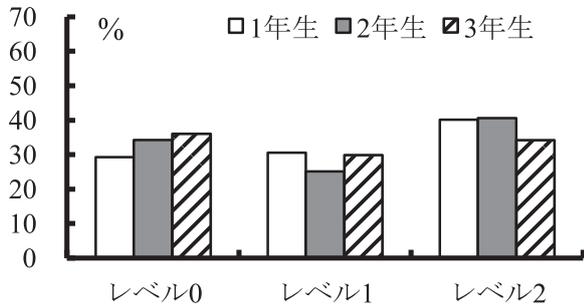


図3 帰納的推論問題の回答者率

(3)演繹的推論問題（問題3-2）の結果

3（レベル：0，1，2）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して，演繹的推論問題の回答における各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討したが学年差は認められなかった（図4）。

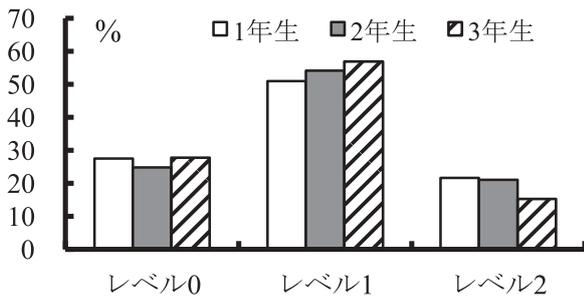


図4 演繹的推論問題の回答者率

2. 社会的判断力育成型問題の調査結果

(1)価値判断・意思決定問題（問題2-1）の結果

3（選択肢：①，②，③）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して，価値判断・意思決定問題における選択肢の選択傾向に学年差が見られるか否かを検討した（図5）。その結果，①（賛成である）を選択した人数割合は，2年生（41.3%）で多く，3年生（20.5%）で少なかった。②（反対である）を選択した人数割合は，3年生（59.6%）で多く，2年生（41.3%）で少なかった。

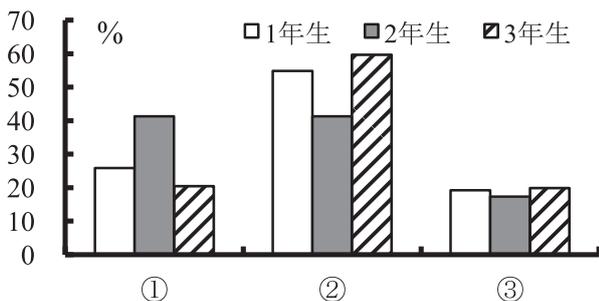


図5 価値判断・意思決定問題の回答者率

(2)社会的判断問題（問題2-2）の結果

次に，3（レベル：0，1，2）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して，社会的判断問題の回答における各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した（図6）。その結果，レベル0の人数割合は2年生（36.6%）で多く，3年生（12.1%）で少なかった。レベル1では2年生（33.1%）で少なく，レベル2では3年生（40.4%）が多かった。

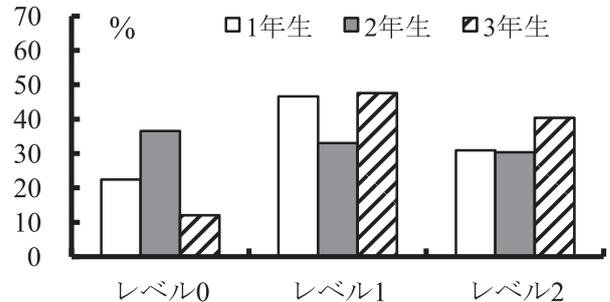


図6 社会的判断問題の回答者率

3. 批判的思考力育成型問題（批判的思考問題（問題4））の調査結果

3（レベル：0，1，2）×3（学年：1年生，2年生，3年生）の χ^2 検定を使用して，批判的思考問題の回答における各レベルに分類される各学年の人数割合の偏りについて検討した（図7）。その結果，レベル1の人数割合は，1年生（55.7%）で多く，3年生（33.3%）で少なかった。また，レベル2では3年生（53.1%）で多く，1年生（24.7%）と2年生（26.8%）で少なかった。

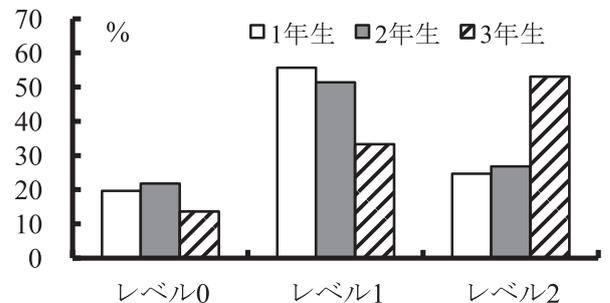


図7 批判的思考問題の回答者率

V 調査結果の分析②

—社会的思考力・判断力の関係性—

1. 事実判断問題と帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題の関係性

事実判断問題における指摘数が他の問題（帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題）におけるレベルと関連するかどうかについて分散分析を使用して検討した。その結果，事実判断問題の指摘数はいずれの問題においてもレベル間差が見られなかった（表3）。

表3 帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題のレベル間での事実判断問題における平均指摘数比較

	レベル0	レベル1	レベル2	分散分析結果
帰納的推論問題	2.10	1.98	2.19	レベル間差なし
人数	153	131	176	
演繹的推論問題	1.99	2.16	2.25	レベル間差なし
人数	115	231	83	
社会的判断問題	2.22	1.94	2.11	レベル間差なし
人数	110	204	161	
批判的思考問題	2.10	2.24	2.07	レベル間差なし
人数	125	83	207	

2. 帰納的推論問題と演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題の関係性

帰納的推論問題においてレベル2に分類された者が，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題ではどのような評価を得ているかについて χ^2 検定を使用して検討を行った（表4）。その結果，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題のいずれでも統計的に意味のある偏りが見られた。演繹的推論問題では，レベル1に分類される人数が多く，レベル0とレベル2に分類される人数が少なかった。社会的判断問題では，レベル1とレベル2に分類される人数が多く，レベル0では少なかった。批判的思考問題では，レベル1とレベル2に分類される人数が多く，レベル0に分類される人数が少なかった。

以上の結果から，帰納的推論能力が高いと評価される者は，社会的判断や批判的思考の能力も高いと評価される傾向にあると考えられる。

表4 帰納的推論問題でレベル2に分類された者の他問題でのレベル

	レベル	人数	%	有意性	χ^2 検定
演繹的推論問題	0	31	18.9	(-)	$\chi^2(2) = 32.28$ $p < .001$
	1	88	53.7	(+)	
	2	45	27.4	(-)	
社会的判断問題	0	28	15.9	(-)	$\chi^2(2) = 26.81$ $p < .001$
	1	65	36.9	(+)	
	2	83	47.2	(+)	
批判的思考問題	0	22	12.8	(-)	$\chi^2(2) = 34.90$ $p < .001$
	1	83	48.3	(+)	
	2	67	39.0	(+)	

(-)は，統計的に有意に人数が少ないことを意味する。(+)は，統計的に有意に人数が多いことを意味する。

3. 批判的思考問題と帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題の関係性

批判的思考問題においてレベル2に分類された者は，帰納的推論問題や演繹的推論問題，社会的判断問題でも高い評価を得ているか否かについて χ^2 検定を使用して検討を行った（表5）。その結果，帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題のいずれでも統計的に意

味のある偏りが見られた。帰納的推論問題では，レベル2に分類される人数が多く，レベル1に分類される人数が少なかった。演繹的推論問題では，レベル1に分類される人数が多く，レベル0とレベル2に分類される人数が少なかった。社会的判断問題では，レベル1とレベル2に分類される人数が多く，レベル0に分類される人数が少なかった。

以上の結果から，批判的思考力が高いと評価される者は，帰納的推論や社会的判断の能力も高いと評価される傾向にあると示唆される。

表5 批判的思考問題でレベル2に分類された者の他問題でのレベル

	レベル	人数	%	有意性	χ^2 検定
帰納的推論問題	0	51	32.5	<i>n. s.</i>	$\chi^2(2) = 7.54$ $p < .05$
	1	39	24.8	(-)	
	2	67	42.7	(+)	
演繹的推論問題	0	46	30.9	(-)	$\chi^2(2) = 14.19$ $p < .01$
	1	70	47.0	(+)	
	2	33	22.1	(-)	
社会的判断問題	0	28	17.2	(-)	$\chi^2(2) = 19.15$ $p < .001$
	1	67	41.1	(+)	
	2	68	41.7	(+)	

(-)は，統計的に有意に人数が少ないことを意味する。(+)は，統計的に有意に人数が多いことを意味する。*n. s.*は，統計的に人数の偏りがなかったことを意味する。

4. 帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題の関係性

帰納的推論問題，演繹的推論問題，社会的判断問題，批判的思考問題の各問題においてレベル0～レベル2に分類された者が，他の問題においてどのような評価を得ているかについて χ^2 検定を使用して検討を行った（表6）。その結果，帰納的推論問題と演繹的推論問題，帰納的推論問題と社会的判断問題，演繹的推論問題と社会的判断問題，社会的判断問題と批判的思考問題において統計的に意味のある偏りが見られた。帰納的推論問題と演繹的推論問題では，帰納的推論問題でレベル2に分類された者は演繹的推論問題でもレベル2に分類される者が多く，帰納的推論問題でレベル0に分類された者は演繹的推論問題でもレベル0に分類される者が多かった。帰納的推論問題と社会的判断問題でも同様に，帰納的推論問題でレベル2に分類された者は社会的判断問題でもレベル2に分類される者が多く，帰納的推論問題でレベル0に分類された者は社会的判断問題でもレベル0に分類される者が多かった。演繹的推論問題と社会的判断問題及び社会的判断問題と批判的思考問題でも同様に，一方の問題でレベル2またはレベル0に分類された者はもう一方の問題でも同じレベル（レベル2またはレベル0）に分類される者が多かった。

以上の結果から，帰納的推論能力が高いと評価される者は，演繹的推論能力や社会的判断能力が高いこと，演繹的推論能力が高いと評価される者は，社会的判断能力

表6 帰納的推論問題、演繹的推論問題、社会的判断問題、批判的思考問題における各問題間のレベル比較

		演繹的推論問題			社会的判断問題			批判的思考問題		
		レベル0	レベル1	レベル2	レベル0	レベル1	レベル2	レベル0	レベル1	レベル2
帰納的推論問題	レベル0	48 (34.8%)	75 (54.3%)	15 (10.1%)	44 (29.1%)	71 (47.0%)	36 (23.8%)	28 (19.0%)	68 (46.3%)	51 (34.7%)
	レベル1	34 (28.1%)	65 (53.7%)	22 (18.2%)	32 (24.4%)	57 (43.5%)	42 (32.1%)	25 (20.2%)	60 (48.4%)	39 (31.5%)
	レベル2	31 (18.9%)	88 (53.7%)	45 (27.4%)	28 (15.9%)	65 (36.9%)	83 (47.2%)	22 (12.8%)	83 (48.3%)	67 (39.0%)
	χ ² 検定	χ ² (4) = 17.94, p < .01			χ ² (4) = 21.62, p < .001			χ ² (4) = 4.16, n.s.		
演繹的推論問題	レベル0	/			37 (32.2%)	47 (40.9%)	31 (27.0%)	22 (19.6%)	44 (39.3%)	46 (41.1%)
	レベル1				47 (20.5%)	99 (43.2%)	83 (36.2%)	40 (17.5%)	118 (51.8%)	70 (30.7%)
	レベル2				10 (12.2%)	32 (39.0%)	40 (48.8%)	12 (15.2%)	34 (43.0%)	33 (41.8%)
	χ ² 検定				χ ² (4) = 15.79, p < .01			χ ² (4) = 6.64, n.s.		
社会的判断問題	レベル0	/			32 (31.1%)	43 (41.7%)	28 (27.2%)	32 (16.4%)	96 (49.2%)	67 (34.4%)
	レベル1				32 (16.4%)	96 (49.2%)	67 (34.4%)	16 (10.1%)	74 (46.8%)	68 (43.0%)
	レベル2				16 (10.1%)	74 (46.8%)	68 (43.0%)	χ ² (4) = 21.21, p < .001		
	χ ² 検定				χ ² (4) = 21.21, p < .001					

(-)は、統計的に有意に人数が少ないことを意味する。(+)は、統計的に有意に人数が多いことを意味する。n.s.は、統計的に人数の偏りがなかったことを意味する。

が高いこと、社会的判断能力が高いと評価される者は、批判的思考力が高い傾向にあることが示唆された。

VI 結果の考察と今後の課題

本研究の目的は、これまでの調査を通して得られた中学生の社会的思考力・判断力の発達とそれを構成する諸能力の関係についての仮説を、調査対象を広げることによって検証することであった。分析の結果から以下の2点が明らかになった。

① 社会的思考力・判断力の発達

本研究では社会科学力としての社会的思考力・判断力を構成する能力として、社会認識力(事実判断力)、社会認識力(帰納的推論能力)、社会認識力(演繹的推論能力)、社会的判断力、批判的思考力の5つを想定した。分析結果より、社会的判断力と批判的思考力は学年進行に伴って高くなる傾向が見出され、それは特に2年生から3年生にかけて伸長する傾向にあった¹³⁾。

② 社会的思考力・判断力を構成する諸能力の関係

本研究では分析にあたって、事実判断力は社会的思考

力・判断力の基盤となる能力であること、社会的思考力・判断力を構成する上記の5つの能力は、後者の能力が前者にくらべてより難度の高い能力であること、の二つを仮定して検討を進めた。分析結果より、事実判断力が高ければ他の能力も高いという明確な関係性は見出されなかった。しかし、帰納的推論能力、演繹的推論能力、社会的判断力、批判的思考力のレベルの関連性を検討した2つのχ²検定結果(Vの2と3)から、帰納的推論能力が高い者や批判的思考力が高い者は、演繹的推論能力を除く他の能力レベルも高いと評価される傾向にあった。また、それぞれの能力間の関連性を検討したχ²検定結果(Vの4)から、帰納的推論能力が高い者ほど演繹的推論能力や社会的判断力が高いこと、演繹的推論能力が高い者ほど社会的判断力が高いこと、社会的判断力が高い者ほど批判的思考力が高い傾向にあり、社会的判断力においては他のいずれの能力とも関連性が見出された。これらのことから、帰納的推論や演繹的推論から社会的判断へ、また社会的判断から批判的思考へという能力の難度の順序性や能力間同士の相互関連的な関係が想定される。

本稿は、質問紙による横断的調査を通して中学生の社会認識発達の傾向や特徴を把握していくことを第一の目的としており、今後、中学生の社会認識の発達を促進する社会科授業について実験・実証的に検討していくことが必要である。今後の課題として以下の3点をあげたい。

- ① 縦断的調査のデータを比較・分析することによって、中学生の社会認識発達の傾向・特徴をより総合的に検討すること。
- ② 歴史問題の調査結果と本調査結果を比較することによって、社会的思考力・判断力の発達の分野による特殊性について検討すること。
- ③ 中学生の社会認識の発達に即した授業改善、授業構成の視点を提示すること、及び中学生の社会的思考力・判断力の発達を促進する指導方略について具体的に検討すること。

〔付記〕本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C））、研究課題「小・中学生の社会的思考力・判断力の発達に基づく社会授業モデルの開発研究」、課題番号23531199に基づいて実施した。調査にあたり、快くご協力下さった中学校の先生方と生徒の皆様へ感謝を申し上げます。

〔註〕

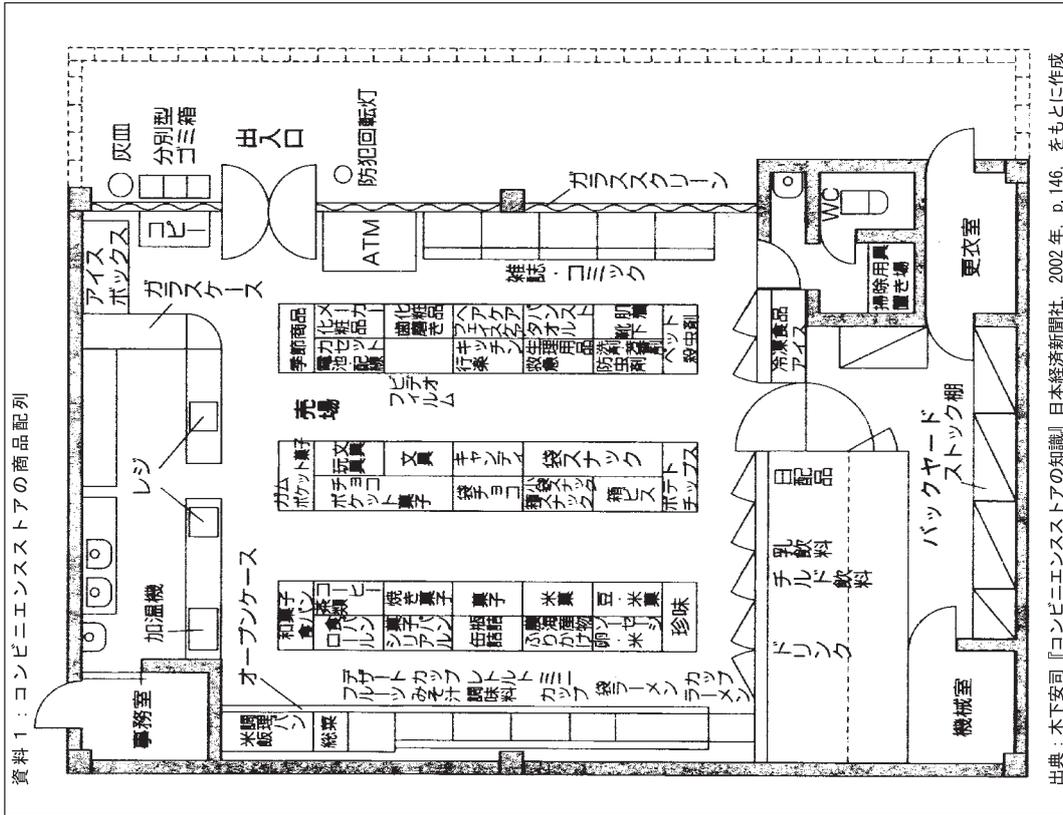
- 1) 加藤寿朗『子どもの社会認識の発達と形成に関する実証的研究』風間書房、2007年、加藤寿朗・和田倫寛「子どもの社会認識発達に基づく小学校社会科授業の開発研究」『社会系教科教育学研究』第21号、2009、pp.1-10。
- 2) 本稿における「社会的思考力・判断力」という用語は、「社会科授業で育成をめざす社会的事象に関する思考力・判断力」という意味で用いる。
- 3) 加藤寿朗・梅津正美・前田健一・新見直子「中学生の社会認識の発達に関する調査的研究（Ⅰ）－思考力・判断力の発達に焦点をあてて－」『社会認識教育学研究』26号、2011年、pp.1-10、同「中学生の社会認識の発達に関する調査的研究（Ⅱ）－思考力・判断力の関係性に焦点をあてて－」『社会認識教育学研究』27号、2012年、pp.1-10。
- 4) 歴史的な分野を取り上げた調査の結果については、梅津正美・加藤寿朗・前田健一・新見直子他「中学生の社会的思考力・判断力の発達に関する研究（Ⅰ）－歴史的な分野を事例とした調査を通して－」『鳴門教育大学研究紀要』第28巻、2013年、を参照願いたい。
- 5) 前掲書1）、pp.11-31。

- 6) 調査問題の作成にあたっては、生徒の回答に要する時間的な負担を考慮して、過去と現在の事例としての歴史問題と公民問題に限定した。公民問題では生徒がより回答しやすい事例として日常的に経験しているコンビニエンスストアを取り上げた。
- 7) 認知心理学者の西林克彦氏が、以下の著書の中で、子どもの認知構造をとらえ説明するのに用いた知識事例を、社会的事象に関する「知識の構造」を例示するために筆者が加筆・修正した。
・西林克彦『間違いだらけの学習論：なぜ勉強が身につかないか』新曜社、1994年、pp.76-88。
- 8) 社会科学力と「関心・意欲・態度」との関係については、以下の文献で詳述している。
・梅津正美「社会科におけるテスト問題構成の方法－社会科学力評価－」『鳴門教育大学研究紀要』第22巻、2007年、pp.175-178。
- 9) 調査問題の3類型をそれぞれ「育成型」と表現しているのは、本研究が、中学生の社会認識発達の実相の解明に基づく授業開発を通して、その発達をよりよく促進していくことを最終的なねらいにしているからである。
- 10) ここでの「社会認識力」は、「社会的事象について知り・分かる」レベルの事実認識能力に限定して用いている。社会科教育の本質的な目標である「社会認識の形成（＝社会科学力形成）」は、「（狭義の）社会認識力」「社会的判断力」「批判的思考力」の総体としての成長を意味している。
- 11) 「議論」の基本構造については、足立幸男『議論の論理：民主主義と議論』木鐸社、1984年、p.100、を参照した。
- 12) 調査問題は、論文末に資料として掲載する。
- 13) なお、歴史問題では演繹的推論能力も2年生から3年生にかけて伸長する傾向が見られた。本稿は公民問題に限定して分析を行ったが、調査結果に見られる分野間の違いについては調査問題の内容の検討を含めて今後の課題としたい。

〔本稿において、加藤はⅠ、Ⅵを、梅津はⅡを、前田と新見はⅢ、Ⅳ、Ⅴを主に分担執筆した。調査問題の作成及び予備調査の実施にあたっては大島、竹崎、原、前島が分担協力した。〕

〔資料〕公民調査問題

資料 1 : コンビニエンスストアの商品配列



出典：木下安司『コンビニエンスストアの知識』日本経済新聞社、2002年、p.146、をもとに作成

1. これはテストではありません。設問に対して、あなたが考えたことを書いてください。

2. 答えてもらったことは、学年ごとにまとめて分析するので、あなたがどのように答えたかを人に知られることはありません。

3. 時間は設定しませんので、問題をよく読み、よく考えて、最後まできちんと書いて下さい。

() 中学校 () 年 男・女

番

問題 3

コンビニエンスストアでは、お客が買い物をしてレジを通して、バーコードなどから商品名、数量、販売時間、客の年齢・性別に関する情報をコンピュータで集計・管理するしくみが出ています。これを「POS（ポスト）システム」と言います。

小問 1

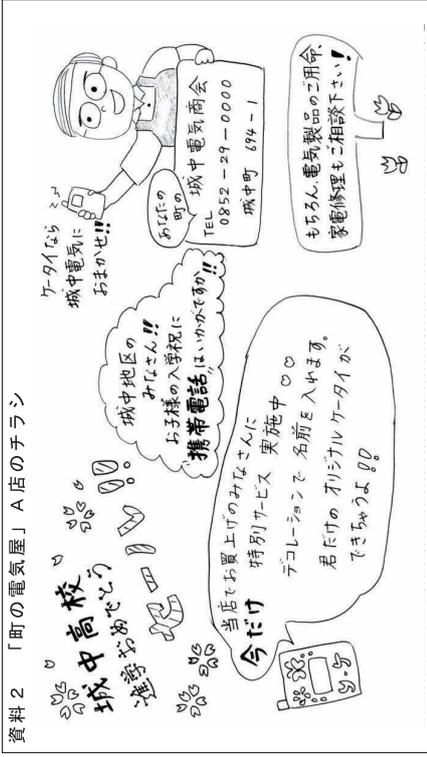
あなたがコンビニエンスストアの店長だったら、売り上げを伸ばすために、このPOS(ポスト)システムからの情報をどのように活用しますか。

小問 2

あなたが店長をしているコンビニエンスストアの近くに、最近、別のコンビニエンスストアが建ちました。あなたは、売り上げを伸ばすために、POS(ポスト)システムからの情報(商品名、数量、販売時間、客の年齢・性別)以外にどのような情報を集めますか。集めたい情報とその理由をすべて書きなさい。

問題 4

山中町の家電屋についての話です。この町では最近、大型の電気店ができました。次の文は、個人経営の「町の電気屋」であるA店の店長さんと、さとの君、まさみさんの会話文です。下の資料2を参考にしながら、さとの君の文中の□に入れる言葉を考えて、下の□に書きなさい。



さとの君：最近、お店の近くに大きな電気店ができましたね。

店 長：そうなんだ。大型家電量販店というのだけど、大きい建物なのでたくさん種類の電気製品をそろえている。その他にも、ポイントサービスや現金の値引きもしているらしいんだ。

まさみ：だからA店では、新しいチラシ(資料2)を作って配っているのですね。さとの君：なるほど。このチラシを見ると □ をねらっているのですね。

店 長：お店を続けていくためには、その店の特徴に合った経営をすることが必要なんだ。